

新たな魚病の侵入に注意！

水産物は、日本人にとって重要な食料であり、古くから養殖業が営まれてきた。全国的には、マダイ、ブリ、クロマグロ、ニジマス、ウナギ、コイ、ホタテガイ、コンブ、ワカメ等が、岡山県では海面でノリ、カキ、ヒラメ等、内水面ではマス類、コイ、アユ等がそれぞれ養殖されている。

養殖が盛んに行われるにつれて問題となってきたのが、魚病の発生である。養殖が始められて久しくなるが、次々と新たな魚病が発生している。内水面ではコイヘルペスウイルス病が、海面ではクルマエビ急性ウイルス血症(PAV)がその一例である。前者は 2003 年に、後者は 1993 年にそれぞれ日本で初めて発生が確認された。

日本国内で、新たな魚病を発生させないためには、外部からの侵入を阻止することが極めて重要である。病原体の侵入経路の主なものとしては、①外部から持ち込んだ種苗とともに侵入、②飼育水等から侵入、③施設に出入りする人や動物等から侵入の 3 つがあげられる。特に注意が必要なのは①で、事前に飼育水槽等を消毒しても、肝心の種苗が保菌していれば、容易にその養殖場に新たな魚病が侵入する。

日本に侵入し定着した主な魚病を表に記載した。アユの冷水病やコイヘルペスウイルス病のように侵入経路が不明な事例もあるが、ほとんどの魚病が外国産種苗等の輸入に伴って我が国に侵入したと考えられている。



写真. 冷水病で死亡した県内河川のアユ(1996年)

国内未侵入の病原体が侵入すると、病原体の天敵や、また魚介類自身に耐性がないために、養殖魚や天然魚等に甚大な被害を与える可能性が高い。さらに、一旦国内に侵入定着したら、撲滅は困難である。

コイ春ウイルス血症は、ヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、中国等で発生が報告されているが、日本に未侵入の魚病で、コイ、ソウギョ、フナ、金魚などコイ科魚類の多くが感染し、死亡率の高い病気である。この恐ろしいウイルスが、英国に輸出された中国産金魚から検出されている。

また、オイスターバーを中心に「殻付き生ガキ」

表. 日本における新疾病発生(侵入)の歴史

病名	魚種	疑われる感染源	国内初確認
IHN(ウイルス性造血器壊死症)	サケ科魚類	北米産輸入卵	1971年
BKD(細菌性腎臓病)	サケ科魚類	北米産輸入卵	1973年
アユの冷水病	アユ等	(不明)	1987年
サケ科魚類の冷水病	サケ科魚類	北米産輸入卵	1990年
マダイ・イリド・ウイルス病	マダイ	東南アジア産種苗	1991年
ネオベネデニア症	トラフグ	中国産カンパチ	1991年
コイヘルペスウイルス病	コイ	(不明)	2003年
クルマエビ急性ウイルス血症(PAV)	クルマエビ、ヨシエビ等	中国産クルマエビ	1993年
赤変病	アコヤガイ	中国産アコヤガイ	1994年
被囊軟化症	ホヤ	韓国産ホヤ	2007年

が輸入されているが、フランス、オーストラリア等の輸出国では、日本未侵入のカキヘルペスウイルス病(強毒株)によるカキの大量死が発生している。

上記以外にも、日本には存在しない魚病が外国には数多く存在しており、養殖魚あるいは観賞魚等に紛れて日本へ侵入しようとしている。

現在、魚類防疫上、非常に危険な状態であり、新たな魚病の侵入による影響は計り知れない。このため、水際での防疫対策の徹底が望まれる。

(内水面研究室 増成)